

# 福島区歴史研究会 会報

## 第一〇号

2018. 2

### 目次

藤の棚の歌人・矢澤孝子	1
一 はじめに／二 大阪歌壇登場までの歩み／	
三 発禁処分になった処女歌集『鶏冠木』／四 第二歌集	
『はつ夏』／五 空想の世界から現実世界に回帰した第三	
歌集『湯気のかく絵』／六 「藤之歌舎」の結成／	
七 遺稿集『矢澤孝子歌集』にみるその後の矢澤孝子／	
八 矢澤孝子の歌に見る明治末から大正時代初期の野田	
福島風景／九 おわりに	
長屋の調査（海老江東地区） 末廣 訂	18
わが町案内・・・末廣 訂	19
阪神電車初代社長・外山脩造―100年	20
を経て今に引き継がれるDNA	
平成二九年第二回セミナー報告・・・末廣 訂	22
関に護られた都・難波宮―	
―平成二九年第三回 報告― 林 俊二	24
下半期の事業・下半期の活動記録・・・	



## 藤の棚の歌人・矢澤孝子 藤 三郎

### 一 はじめに

ある日、母の遺品の中から少し色あせた『矢澤孝子歌集』（あけび叢書第二十三編）が出てきた。矢澤孝子に四〇年余り連れ従った弟子であり友人であり、またこの歌集の編纂に多大の労をとられた阿部文子さんから、ご近所にご在住の中西きく恵さんに恵送されたものが、どういう訳か母の手に渡りそのまま眠っていたようである。

戦前は（玉川）春日神社①の境内には、稻荷社と共に元禄時代に作られた小さな藤棚があり（写真）、ここには昭和十年頃、植物学者・牧野富太郎博士も調査に来ていた。現在マンション・エスポワールの西南角にある藤棚とほぼ同じ位置にあった。藤棚の南東側、現在の新たなわ筋に面した一角③に、矢澤孝



戦前の（玉川）春日神社②

子（雅号・楓<sup>かえで</sup>）は明治三八年（一九〇五）から昭和十八年（一九四三）まで三八年間住んでおり「藤の棚の歌人」と呼ばれていた。この地名にちなんで、後に和歌の同人会「藤之歌舎」も結成している。堂々たる師匠の貫禄を備え、主婦でありながら門弟は無論の事出入りの商人も「奥さん」とは決して呼ばず、「先生」と呼んでいて、それが当然の事のようにであった。なおこの藤棚の北側には長楽先生という医師が住んでおり「藤の棚の先生」と親しみを込めて呼ばれていた。この周辺は、紡績工場に通う女工さんらが行き来する下町であった。付近には工場の大煙突も立ち煤煙が舞っていた。現在ならば、さしずめ環境問題になりそうな状況であったが、それが大阪の近代化の象徴であり、あまり気にしていなかったようである。

本会報誌発行の機会に、かつて「関西の与謝野晶子」と呼ばれ、明治末期から大正モダンイズム歌壇において「関西随一の才媛」ともてはやされ、

昭和の戦後まで現役女流歌人として活躍し、そして忘れ去られた大阪が生んだ女流歌人・矢澤孝子について、市川良雄氏

④の調査結果を紐解



矢澤孝子

（『矢澤孝子歌集』より）

き、これを出発点として矢澤孝子の歌集及び明石利代<sup>⑤</sup>著『女子大文学』国文編を加えその生涯を辿ってみた。

\*\*\*\*\*

- ① 大阪市福島区玉川二丁目二一七 野田藤発祥の地として知られる。現在は 小さな社と**大阪市顕彰碑「野田の藤跡」**の石碑が残っている。
- ② 大阪市天守閣所蔵「南木コレクション」より。
- ③ 当時の住所は**北区（のち此花区）** 玉川町一丁目四七。現在の（株）中井青果付近。
- ④ 『西野田・福島 所縁の人々 西野田・玉川・藤の棚の歌人』市川良雄編（二〇一一・八・二〇）
- ⑤ 明石利代 元大阪府立女子大学教授『関西文壇の形成』（前田書店、昭和五十年）という大著がある

## 二 大阪歌壇登場までの歩み

矢澤孝子は丹波篠山藩・藩士矢澤一貫を父とし、明治一〇年（一八七七）兵庫県多紀郡篠山町に生まれた。

明治二五年、大阪府立堂島女学校（後の大手前高校）に入学したが、翌年中退し、大阪電話交換局技手に合格。直ちに判任官に推され、通勤の傍ら市立東洋学館夜学部に入學、漢学及び英語を学んだ。

明治一九年、孝子が一〇才の時この父に死別したため、明治二一年母は孝子を連れて紀州藩・勘定奉行の次男・井口徹一郎氏と再婚した。維新後、徹一郎は兄とともに大阪を拠点として

海運業を営み大阪商船会社の設立にも携わった人物である。孝子は母の再婚に伴って北区富島町に転居した。

明治二八年、一九才で教員検定試験に首位で合格し、市内鞆小学校、府下高槻小学校に奉職しながら、自宅で受験生のために、英語・数学などを教えていた。

明治二九年、義父・井口徹一郎氏の先妻の子・達雄氏と結婚した。達雄氏は神戸菅谷会社に勤務し、海外航路の機関長をしていた。

孝子が大阪歌壇で本格的に活躍を始めたのは明治四〇年頃であり、同四三年に『鶏冠木』を刊行した時は、すでに三四才であった。当時の女流歌人・与謝野晶子などが二〇才そこそこから活躍を始めたのに比べると、かなり遅い歌壇への登場であったといえる。しかし歌学にかわり始めたのは早く七才の時には既に父から漢籍の素読・習字を学び、中村良頭⑥に短歌を学び初めて歌を作った。良頭は、幕末の紀州藩にあつて要職にあつた国学者・加納諸平ちゅうへいの高弟であり当時大阪で教えていた。孝子は紀州藩上級武士の風格がある義父・徹一郎の勧めもあつて良頭の指導の下、歌学に励んだが旧派の歌壇に止まっていたようである。明治三〇年ころの大阪にはまだ新しい文学運動は起こっておらず、それに関心を持つ青年たちも力量不足であった。

しかし明治三三年、良頭が死去した。同じ年、大阪で最初の総合文学雑誌『小天地』が創刊され新人の発見登龍を意図する

ようになり、与謝野鉄幹選による懸賞短歌の募集を始めるようになった。明治三四年、その第一回懸賞に「富島の矢澤楓」と言う雅号で応募し、「桃花」という課題に、次の句が五等になっている。

いく年か伐らまくしつ此春も花を喜こぶ畑中の桃

第二回は、大阪の矢澤堇の名で応募し、「暮春」の課題に対し次の句が四等になっている。

経に倦みて恋ものがたりつづ繻つづきぬ法師もさびし春の空

その後も『小天地』に次々入選し、投稿者として鉄幹の短歌壇に接し始めたが、まだ主婦の趣味程度であった。孝子が新しい短歌の動きにかかわるようになったのは、明治三六・七年頃、岡夕風⑦の誘いによるものと思われる。岡夕風は、岡秋浦という筆名で『小天地』に応募していた人物と同一人と思われる、『小天地』での孝子の応募短歌に成長する新人を認めただからであると考えられている。

明治三八年末、関西新詩社大阪支社が設立され、そこから発行された詩歌雑誌『炎（ホノホ）』の編集部幹事として岡夕風の名があり、その頃から『炎』に掲載される夕風の短歌の数が増えたことから、岡夕風は関西新詩社の活動の中心的役割を果たしていたようである。

そして前述のように明治三八年、二九才で北区富島町から北

区玉川町に引越してきた。当時、玉川町には矢澤孝子が、中江町には花岡桃崖⑧が江成町には岡夕風が僅か二・三百メートルを隔てて住んでいた。自然毎日のように顔を合わせこの付近は短歌で遊ぶ若い人々が入れ替わり訪問し、この頃はまさに大阪歌壇の揺籃期であった。ちなみにホトトギス派の俳人松瀬青々は明治三八年から大正一〇年まで海老江に住んでいた。その頃は現在の福島区は結構文化的な雰囲気があった感じがする。なお松瀬青々も孝子と同じく中村良頭から和歌を学んでいるので、二人は同門と言える。

矢澤孝子の作品が初めて『炎』に載るのは三九年八月刊に「月下」と題して短歌ではなく韻文形式の長歌であった。

寝るには惜しき今宵の空、月下に佇む切なる思い、  
静しき夜の気を徹して遠く、人の心に滲みも入れな、(略)

明治四〇年三月、大阪九条町の大林寺で「炎第一回短歌研究会」が開かれ、以後この研究会は毎月開催された。こうして『炎』への作品の発表を通じて孝子の詩作活動も活発になっていった。この頃の詠歌。

北の洋氷の山の日につどふ海馬輪をなし遠世をつくる  
いささかは頬に心地よき春の風君に逢う夜の髪乱さざれ  
吉野山花に寝し夜のあけぼのを吾まず歩み来りて讚ず  
春風は小草の中に銀の糸日は黄金の綾を織る国

それまでに比べると発表された歌数が増えただけでなく、自由闊達さを増し、古来からの和歌的素材と融合して、新鮮さを増して行った。この頃、主婦の余技の域を脱し、孝子の歌人としての姿勢と意識が固まっていった。

明治四〇年九月、転機が訪れる。宮崎に帰省していた若山牧水⑨が帰京の途上大阪に降り、新詩社を訪れ、さらに夕風らと西野田の孝子を訪れ非常な歓迎を受けた。これがきっかけとなって孝子は中央歌壇とのつながりができ、歌の経歴に大飛躍をもたらした。

一方、牧水は土岐善麿・吉田敬次・佐藤利吉ら早稲田大学英文科同級生とともに、同年一〇月から『新声』の編集に携わるようになり中央歌壇において優位に立ち始めた。孝子が中央歌壇において認められた証左は、同年一月刊行の『新声』の「菊の国」と題した一般投稿とは違う特別欄に矢澤楓の名で、

天見れば大いなるかな身ひとつは  
泣くにも足らぬ塵ひぢにして

君おもふ衣の下なる乳の辺の  
胸のひびきか遠砧うつ

けはひやに月うかがへる夕空を  
眺めてべにを忘れけるかな

など六首が岡夕風の句とともに掲げられている。孝子・夕風は『炎』を代表する歌人として牧水が推薦したと思われる。次



の一二月刊行の『新声』に孝子は「秋愁」と題する特別欄の巻頭に、次の歌など十八首を掲げ牧水と知己になったことにより制作意欲を高めてきたことがわかる。

胸こそはおごそかに居れわが若き脈は

血ゆあらぎ燃えたえずして

またしても泣く女とやおもはれむ

これはうれしき涙なれども

夜に匂う君をみしりし春あきの

灯になつかしき思ひ添ふかな

明治四一年刊行の『炎』には「人妻」と題して、

昨日の身にありし力は奪われて妻てふ名こそ世に果敢けれ

美しき子に背向した言ひそと人妻といふ檻を得にける

木の実むく手許を人の見ませるにまだ袖長き妻は消えなき

など二三首と「せせらぎ」と題して十四首も掲げている。こ

のように短期間に四十四首も公表しうる制作意欲と能力を示し女性であり人妻である立場に即しつつ、形式にこだわらず想いをほしいままに馳せ、歌人としての個性を確立していった。

当時の歌壇で中心となっていた雑誌は、『明星<sup>10</sup>』だった。

『新声』で特別扱いを受けたのち、孝子は『明星』に登場することによって歌人としての意識を確かにしようとした。丁度そのころ『明星』では短歌の一般募集が行われた。孝子は、夫の

旧姓・井口孝子として応募した。明治四一年二月刊行の平野万理選による「髪」の題に、

みすまるをやらむ美々しき裳もやらむ

我が黒髪の威をしらぬ子に

春の燈のあまりあかくにくる髪

もゆるばかりの熱いでにけり

同号の与謝野晶子の選で「海」という題にも井口孝子の名で、

日輪は熱と光を射たまひぬやがて燃えぬる火の海われは

当時の歌壇に君臨している『明星』に知己もなしに初めて投稿するに際し、井口の姓に隠れて投稿したようである。次の号からは本名の矢澤孝子で応募し選に選ばれている。

明治四二年七月、矢澤孝子は若山牧水とむすび『八少女』の

編集同人となった。「八少女会」の活動を軸として名古屋・神戸・千葉など各地の有力歌人グループと連携を深め大阪短歌会の結成にこぎつけた。

『八少女』第一巻二号に「大阪雨滴会」として掲げられている孝子・夕風・桃崖の詠草を紹介する。

花ぬらしわが袖ぬれし春雨は

なほあたたかき天地にふる

矢澤孝子

鐘なりぬ哀しき國の夕闇に

煙ひとすじ暮れのころかな

岡 夕風

紅のしおりの花ぞ類に散りぬ

ねそべりて読む桐壺の巻

花岡桃崖

この会合は大阪における新短歌界の最初のものとなった。

明治四二年一月に、孝子は自ら編集のトップとして大阪短歌会の歌誌『白楊』を創刊した。ここで注目されるのは、孝子が短歌のほかに小説を載せていることである。いよいよ関西歌壇の第一人者となってきた孝子は、大胆で闊達な歌いぶりから与謝野晶子に擬しられるのに応えて晶子のように小説を試みたと考えられる。この頃、孝子は「関西の与謝野晶子」と自他ともに認め始めていた。

明治四三年五月都会詩社から『都会』という月刊誌が、宮飼栄主宰、段谷秋洋・百田楓花の援助を受けて刊行された。当時の歌壇で頭角をあらわしてきた新進の歌人・百田楓花<sup>⑩</sup>は、当時一七歳、後に民衆派の詩人・児童文学者・作詞家として大きな業績を残した。童謡「どこかで春が」の作詞で知られる百田宗治（楓花）は全国三五校の校歌を残しており、今なお唄い継がれている。

\*\*\*\*\*

⑥ 中村良顕 幕末明治時代の国学者、歌人。著作「歌文答問録」等、明治十五年から大阪で教えていた。

⑦ 岡夕風 堺で詩歌雑誌『炎』を編集していた銀行員。

⑧ 花岡桃崖 大阪帝大の前身高医学生。

⑨ 若山牧水 明治一八年〜昭和三年、宮崎県生まれ。戦前日本の自然派の歌人。本名・繁<sup>しげ</sup>。

⑩ 『明星』 詩歌雑誌（一九〇〇—〇八）。新詩社の機関誌。主宰・与謝野鉄幹。森鷗外らの賛助を得て、相馬御風、高村光太郎、与謝野晶子、山川登美子、石川啄木、吉井勇、北原白秋その他が寄稿した。

⑪ 百田宗治（明治二六年〜昭和五五年）は詩人、児童文学者、作詞家。少年時代の雅号は楓花。歌集『愛の鳥』は「矢澤夫人に献ぐ」とある。

### 三 発禁処分になった処女歌集『鶏冠木』

この百田楓花が『鶏冠木』の刊行に大きな影響を与えた。楓花は明治四四年に『愛の鳥』という歌集を出版しているが、扉には「矢澤夫人に捧ぐ」とあって、楓花の孝子への傾倒ぶりが示されている。岡夕風、若山牧水について、孝子に決定的な影響を与えたのが楓花である。楓花は、孝子を大阪歌壇で宣伝する意図が強く、「関西の晶子」としての印象を強くするため、選歌に際しても多分に主観の強烈なものを取り上げるよう助言したようである。

一方、孝子は新派の女流歌人として有名な与謝野晶子<sup>⑫</sup>に私淑し情熱的な和歌を多く詠んでいた。楓花が孝子の歌風に傾倒するあまり、孝子の処女歌集を自分の後押しで世に送り出そうとして、自宅に白藻社という結社を置き、その事業として明治四三年十月、歌四百数十句をまとめ『鶏冠木』を道頓堀筋の田中書店から刊行した。しかし官憲から発売を禁止され、ごく一

部の人の目に留まったに過ぎない。

この歌集の巻頭には「父の靈に捧ぐ」とあり、孝子の幼少期に学問や短歌の世界に眼を開かせてくれた亡き父への想いの深さとともに明治政府の官僚であった父の靈にあえてこうした自由奔放な歌の巻を捧げたことは、彼女の開き直りのしたたかな姿勢がうかがわれて興味深い。明治四二年八月刊行の『八少女』に掲げた句「いたづらに幾山河を来つれわが思ふ国はいづくならむ」を巻頭におき、明治四三年一月の『八少女黒髪は夢と過ぎたる半生を悔いずまことの我世に入らむ』にのせた句「」を最後に、明治三九年から詠んだ五七九首の歌を選び、自分の今までの生涯を省みている。この中から、与謝野晶子調の歌の一部を抜粋する。

わが胸の小琴がしらぶ想夫恋

星ふる宵も波さわぐ夜も

嗟峨の水清かりしかな君と寝し

あけぼのの戸を引かせけるととき

みだれ髪みだるゝまゝにまかせおきて

君来ときかば解きもあげなむ

君かへるうしろ姿のきゆるころ

はじめて耳にこほろぎをきく

手を伸べてとればとるべき花ながら

君より得ればなつかしきかな

大阪で発禁本となったのは織田作之助の『青春の逆説』があるが、歌集で発禁になったのはこれのみであるという。発禁処分について大阪短歌壇での反応として、宮飼栄が『都会』に掲載した一文を引用する。

「一〇月九日の午前矢澤孝子氏の歌集『かへで』は風俗擾乱の廉で発売及び頒布を禁止された。官憲の圧迫を思はざるを得ない。当局者の没常識を考えざるを得ない。『かへで』の内容については同人の合評を發表し、併せて禁止されたるに就いての意見を公表する考へである。我が手は震へる。我が神経は震へる。嗚呼官憲の圧迫」

この歌集を世に送り出した百田楓花はよほど残念だったに違いない。同じ『都会』の号に「さんたまりあ」なる筆名で『鶏冠木』発禁を歌った九首もの和歌を載せている。そのうちの一首。

あはれなる眼をもてるかなかのやから

玉と瓦をえこそわかたね

このように発禁になったものの、孝子の最初の歌集は歌壇で問題にされ、その才能がはっきり認められたのだから、一応成功だったとみてよいだろう。そして矢澤孝子の意欲も大阪歌壇を地盤として盛り上がった。いったい。

発禁処分の理由については、次のような「妻の立場を蔑視した作風」の歌などほんの一握りの歌が官憲の目に風俗擾乱と映

だったのであろうと考える。大部分は穏当な詠み歌で、後に示すように「野田の藤」を詠んだ歌も三首含まれている。

生涯を黙して君につれ添わば

泣く人形にやや劣るべき

尚なれず妻てふ名あるむくろもて

少女ごころに物を見るかな

水流るゝごとく自然に妻となり

母となるにはあまりに惜しき

人妻は小さき埒結ひそのなかに

みづから住めりあはれなるかな

戦前の発禁書は数十冊が数えられるが、多くは秩序紊乱の書で、風俗擾乱のために発禁になった書は明治末期に出た『嬌楽』<sup>⑬</sup>と『鶏冠木』の二冊に過ぎないという。そして皮肉なことに二冊ともに「明治大正歌書人気番付」東西大関に位置している。

\*\*\*\*\*

- ⑫ 与謝野晶子（明治一一年〜昭和一七年）歌人、作家、思想家。旧姓鳳<sup>ほう</sup>。夫は与謝野鉄幹（寛）。雑誌『明星』に短歌を発表しロマン主義文学の中心的人物となった。日露戦争の時に歌った『君死にたまふことなかれ』が有名である。
- ⑬ 『嬌楽』 牧水と親交のあった近藤元の第一歌集・明治四三年、光華書。

## 四 第二歌集『はつ夏』

明治天皇の崩御により世は大正となるが、大正二年大阪短歌

会の機関紙『白楊』が廃刊になりその結束が緩み始め、その間隙を縫って実力のある小グループが派生した。明治から大正に時代が移り変わる中で百田宗治は新しい文学のあり方を模索しはじめ新しい詩や小説などにも手を広げ始めた。孝子は、小説を試みたことはあったが、短歌一筋を貫いていった。こうして宗治と孝子は離反していくことになる。中央歌壇での立場も確立している孝子が、自分自身の道を歩み始めたその証が、大正三年六月に出版した第二歌集「はつ夏」であると考えて間違いないだろう。

この歌集は「序文」もなく、巻頭写真に続いてただひたすら三五〇首の歌が掲載されていて「序文」など説明を必要としない孝子の自信のほどがうかがえる。この中からいくつかの歌を転載する。



『はつ夏』の巻頭写真

はつ夏のは弓弦をはるごとく

みながらあり思はるゝ身に

物見より寄せての兵をみるごとく

われは露台に人を待つかな

山の峽海の底にもわがこころ

ゆきてかへりぬ放たれぬ身に

絶大の星とばかりに日を見むか

天つみ神とふしおがまむか



青空をながむるひまも人妻は

ゆるされぬゆえおとろへそめむ

木津川の流れを十年前にみる

府庁の屋根の大時計かな

船べりにビールの泡のしぶくとき

月のぼりきぬさし櫛の上

この歌集に対する『大阪朝日新聞』の批評としては、「関西の  
閨秀作家矢澤孝子女史の短歌約三五〇首を集めたものである。

女史の歌は与謝野晶子夫人の歌のように浪漫的な瞑想的な点に  
乏しいがそれだけ強い力を張った所があるのを嬉しく思ふ。言  
ひ回しの気の利いたところ着想の奇警なところに女史の才が認  
められる」。

『大阪新報』の評としては「はつ夏のは弓弦を張ること  
く皆ちからあり思はるゝ身に」女性詩人の歌集を窺われる心地  
がする。調子が流暢なものと装丁の気の利きたるとは確かに初夏  
の気分を充分に顕し得て居る」。これらの批評から中央との関係  
において大阪の文壇に占める孝子の位置が映されている。

『はつ夏』出版後の大正四年一月、花田比露思<sup>⑭</sup>の主催する  
「潮騒」の同人となった。(大正一〇年に『潮騒』は『あけび』  
と改称され今も続いている)

\*\*\*\*\*

⑭ 花田比露思 一八八二〜一九六七。『矢澤孝子歌集』の監修を行い又

その序文を執筆した。教育者、歌人。新聞記者をへて和歌山高商校

長、福岡商大初代学長を歴任。歌集に「さんげ」、歌論集に「万  
葉集私解」。

## 五 空想の世界から現実世界に回帰した

### 第三歌集『湯気のかく絵』

大正四年は孝子にとって多難な時期であった。強力な助言者  
であった百田宗治と袂を分かったことは孝子にとって切ない思  
いであったはずである。更に、この年大学病院に入院し卵巣摘  
出の大手術を受けた。治療と退院後の養生を考えると相当長期  
間孝子の活動は途絶えた。この年孝子は将来のあり方をじつ々  
り考えたであろう。その心の隙間を癒してくれたのが、大正三  
年から公演が始まった宝塚少女歌劇であったかもしれない。

時はさかのぼるが、阪急電鉄の前身、箕面有馬電気軌道創始  
者の小林一三翁が、三越少年音楽隊や白木屋少女音楽隊に想を  
得て、大正二年に結成した宝塚唱歌隊を前身として同三年、宝  
塚歌劇の公演が始まった。その七年後の大正十年から宝塚少女  
歌劇団発行の機関紙『歌劇』に、孝子は劇団から依頼され毎号  
巻頭句を寄稿するようになった。次ページ写真上はその表紙で  
あるが、大正モダンの雰囲気が漂っている。それらの歌をまと  
めて、大正一二年一二月、四七歳の時、『湯気のかく絵』という  
第三歌集を宝塚少女歌劇団出版部から出版された。孝子はその  
「序に代えて」の中で以下のように述べている。

『歌劇 第一号』表紙



『湯気のかく絵』表紙



「七つの年から歌を詠み始めて、けふなほ立派な歌を一首も残し得ない私は、歩みの遅々たることは申すまでもないのですが、途中で漸く邪道に踏み入ったことを何よりも残念に思っております。それはいわゆる新派の流行に巻き込まれて、才や頭で歌を作っていた時代のことなのです。今もなおその残流がそこここに、素人には却って喜ばれている風も見えますが、一旦眼ざめた私は、私自身暫くでもその時流に浸っていたことを慚愧の至りに思ひます。歌は決して才や頭で作るべきものではなく、体験を経た上のしみじみとした実感からの放出でなければなりません。空想でこね上げていい気持で歌っているのは、あれは遊戯で、作り花にたとえ巧みさと美しさはあっても生命のない如く歌本来のものではありません。私は過去に才の歌を多く作って居りますが、一朝それがいけな<sup>い</sup>ことだと悟って以来、空想で作歌することを慎んで避けて居ります。」

この歌集を刊行したところから、歌風を「才と頭で描いた」空想の世界から「現実世界」へ戻るといふ方向転換を行ったこと

が分かる。宝塚歌劇団出版部から歌集として出版したい旨申し出を受けた時、多少困惑しながら承諾した。既に寄稿していた宝塚歌劇の歌に、宝塚以外を詠んだ和歌も多数加えている。なお歌集のタイトル『湯気のかく絵』の由来である歌「いづくなく湯気のかく絵をながめ居ぬうつとりとして湯ぶねの中に」の句は孝子の作ではなく、高安やす子<sup>15</sup>が『歌劇』第三号の冒頭に掲載した句であり、**むろん歌集には掲載されていない**。このことから歌集『湯気のかく絵』は、孝子が序文を書き、追加の歌を寄稿はしたものの宝塚歌劇団出版部に編集を任せていた可能性がある。

### 廣きゆぶね

おほろかに湯気のこもらひいつくしき

ひろき湯ぶねに身をひたしけり

美しき少女<sup>おとめ</sup>もあしのはらすと

けはひおとすと入る温泉<sup>いづみ</sup>かな

湯あがりのかるき身をなげたくひなき

ここにぞよる土耳其椅子かな

### 春日花子<sup>16</sup>へ

さわらびの萌えいづる春の日に

匂ふはな名ぐはしき君にこそあれ

丸髪に結えはいよいよをさなかる

舞台姿はほほえませけり

白たへのむくの面わにけだしくは

たぐふべらなりをとめごころも



春日花子の白萩



高砂松子の悪魔蛇

### 高砂松子<sup>⑱</sup>へ

わくらははに行くわれなればおぼつかなし

かもこころは君に光る、

咲きまじる花はみながらよけれど

好める花に心ひたむく

松子てふ名をおぼえたるその日より

わが好む子をきみとさだめぬ

### 椿

ゆきかひに椿の花を見上ぐれど

いまだあるじを知らぬ家かも

人どほりまれの小みちをいろどりて

垣内の椿たかく日に燃ゆ

湯にゆくもまはりみちしてべに椿もゆる

この家の垣そとをゆく

### 隣の娘

青空に澄し眼をあげおはしに

隣の娘けふもうたえり

隣り家のはしき娘はいつもいつも

うたいてをれり歌劇のうたを

かきろひの春さりくればすがの根の

ながきひねもすうた聲きこゆ

\*\*\*\*\*

⑮ 高安やす子 明治一六年〜昭和四四年。与謝野鉄幹・晶子にまなび紫絃社をおこす。のち斎藤茂吉に師事し、「アララギ」同人。岡山県出身。堂島女学校卒。旧姓清野。歌集に『内に聴く』『樹下』。

⑯ 春日花子 宝塚歌劇団第五期生。夫は元プロ野球選手の湯浅禎夫。娘は二代目春日花子。妹は早川和子。

⑰ 高砂松子 同第三期生。男役。俳優。妹は神代錦。姪は代々木ゆかり

## 六 「藤之歌舎」の結成

大正八年、四三歳にして自ら主宰する藤之歌舎を結成し機関紙『まつ草』を刊行した。昭和三年以降、門弟の有志と共に安江不空<sup>⑱</sup>に師事して熱心に万葉集の研究をした。万葉集に触発され古語を用いて、長歌を詠んだ時期もあつた。藤之歌舎では、歌の添削と万葉集の講義で沢山の人を指導した。孝子は還暦を過ぎてもその作家意欲は衰えず、昭和一〇年、箕面龍安寺にて「藤乃歌舎」歌会を開催、昭和一二年、六一歳の時、藤之歌舎から機関紙『浅茅生』<sup>「あさじう」</sup>を発行（のち昭和一六年に廃刊）、昭和一八年十月、戦火を避けて京都市左京区岡崎円勝寺町に疎開。ここでも門弟数人を集めて万葉集の講義をした。昭和二〇年、さ

らに奈良県箸尾町に疎開し、終戦を迎えた。戦後の昭和二五年に泉佐野市に転居、七四歳にして藤之歌舎を復活し、更に二年後には『あけび』を復刊した。昭和二六年、藤乃歌舎四月歌会で詠まれた歌二首、

和泉のや佐野の里なる我庵は横もうしろも玉葱の畝  
我庵は玉葱の里肉さげて来ませ土産にも玉葱進ぜむ

この「藤乃歌舎」の歌会は亡くなる前年の昭和三〇年まで手塚山・園田で開いていた。衰えを知らぬ創作意欲であった。矢澤孝子はこのように明治末期から大正・昭和の戦後まで現役女流歌人として活動を続けた。

昭和元年、五〇歳の時、御蔵跡図書館<sup>⑱</sup>で、和歌クラスの講師を委嘱され、万葉集の講義及び短歌の指導・添削などを始めた。引き続き同七年には大阪市東区の堀川実務女学校から和歌指導を委嘱され、万葉集の講義を始めた。この頃詠まれた長歌をひとつ紹介する。古代日本の歌を愛し筋金入りの純粋日本人であったことが分かる。

#### 聖上御手植稲歌井反歌（昭和二年六月作）

安見知し我大君 高光る日の皇子 宮柱太敷きいます  
赤坂のうづの離宮 広らなるそのみ庭べに 今年はもみ  
づみづしけく きみどりの早稲苗生ほし 豊秋の穂田の  
厳し穂 黄金なす垂穂の秋を 百しきの大宮人に 朝に  
けに惚ばしめむと 豊葦原瑞穂の國は 神代ゆも豊けき

國 神ながら恵まれし國 遠つ祖のなしのまにまに 大  
御田族民業として ゆく水の絶ゆることなく 樛の木  
いやつきつきに いそしまひ勵まひ来しを その民の心  
汲ますと その民の業知らさむと 云はまくもあやにか  
しこし 現津神我大君の 御手づから齊種下ろさし 水  
無月の水田の中に 眞玉手をひぢかき垂り みづみづし  
その早稲苗を 民がなす業のまにまに 株別かちよき間  
置かしたつ 植付をさせたまひぬ 言絶えて畏きかもよ  
眞清田の足ろうみのりを いとのきてめでたき御食を  
大御手ゆ捧げまさむ日 天津神國津御神も めでたまひ  
讚へますらむあはれ國の穂

#### 反歌

まつりごといそしきみ身に田業さへ  
忘れたまはぬかしこきろかも

\*\*\*\*\*

⑱ 安井不空 歌人・画家。京都生まれ。歌は正岡子規に師事。富岡鉄斎・橋本雅邦に学び画も能くした。

⑲ 御蔵跡図書館 大正一〇年六月開設された阿波座図書館（西区）・西野田図書館（北区）が大阪市で最初の図書館。続いて同年一〇月に御蔵跡図書館（南区）、清水谷図書館（東区）が開館した。

## 七 遺稿集『矢澤孝子歌集』にみる

### その後の矢澤孝子

矢澤孝子が昭和三一年、八〇歳でなくなった時、既刊の歌集は既に紹介した『鶏冠木』（明治四三年）、『はつ夏』（大正三年）、『湯気のかく絵』（大正一二年）の三冊しかなかった。その後詠



まれた歌の多くは、大部分それらを贈られた人々の手中で眠っていた。孝子は整理整頓が厳しい人であったが、不思議なことに、できた歌は清書して人に送ってしまったら、ノートに記録するということはしていなかったようである。残された養女・和美は、散逸した和歌を探すだけでも大変なことであった。八方手を尽くして集めた歌を阿部文子さんが中心となって編集し（この歌集の正式の編集者は継子の三夫氏になっている）、花田比露思氏が監修の労をとり「序」を寄稿した。こうして完成したのが『矢澤孝子歌集』である。大正一二年から亡くなる直前までの短歌九九三首と長歌は十数首の中から四首が収録されている。出版されたのは没後六年を経た昭和二七年二月であった。内容は、それまでの乙女が夢見るような歌から生活感が漂う現実的な歌が徐々に増えてくる。母の看病、魚釣り、銭湯への道、身延山への義父の納骨、吉野山や高野山への旅行、伊吹山・鞍馬山登山、道明寺など各地での歌会での出来事・・・と多岐に亘って詠まれた歌が集められている。当時の女性としてはよく旅行をしていたようである。これらの出来事が年を追って歌として記録されている。

### 春逝く

母の手の神経痛2年に亘りて癒えず

(大正一二年)

病む母をもちてこもらひかぎろひの

春は過ぎゆく花も見なくに

花屋より買ひし桜を瓶に活け

見しばかりなる春なりしかな

長病を嘆かす母の吐息洩れ

隣の室まなるわれも泣きぬる

身延山 父の納骨のため十月八日

夜汽車にて大阪を立つ (大正一二年)

秋更けてみ山ははやも寒けむと

母は気づかはす旅立つわれを

あすの夜は身延の山に見む

月の皎々と照るにかしまだちする

金襴に包む骨箱ひぎに据え父と共なる旅とこそ思へ

魚釣り (大正一四年)

いくばくを漕ぎいでにけむ秋のそら

真澄みの下にわが船はをり

間近なる釣船の中にわが如く

女も居りて親しきおぼゆ

沖見れば澄みわたる秋の水ひかり

釣船あまた並びたりけり

昭和一六年、夫・達夫病死。この年に詠まれた歌は残っていない

ない

服喪おりおりの歌 (昭和一七年)

侍たのみ来し真柱倒れ曲庵まがらの

壊庵くわいあんにして息するわれは



今はただ強く生きよと人は言えど

惜しき命とおもほえなくに

吾は生きて子を守るべく背は死にて

吾を守らす世の事なしに

弟子であり友人の阿部文子さんとは家族ぐるみ付き合っていたようであるが、昭和一三年、夫・阿部照雄氏が商用で旅先の三朝温泉で狭心症のために急死した。またそのご子息・俊郎氏が戦死した際に詠まれた歌。

三朝なるいでゆの宿に家妻を

千たび呼びびけむいまはの胸に

一夜だに妻がみとらばせめてもの

心やりにもなりけむものを

生業の旅馴れたる君がいかなれば

帰らぬ道に迷い入りけむ

### 阿部俊郎君の戦死を悼む（昭和二一年）

よしゑやしむくろは山に朽つるとも

母を慕ひて帰らざらめや

ひと目だに母見まほしと思ひけむ

そのいやはての心惚ばゆ

### 阿部さん来訪（昭和二八年）。

いささかの打ち合わすべき事ありて

友は訪ひ来ぬ思はぬ時に

雨ふりて海へは行けずわが部屋に

語りつきつつ夜更けにけり

き夜ふすま並べて寝ねて枕べに

本は置けども読まず語るも

### 旅行中の娘の家に留守番する

### 阿部文子さんを訪ふ（昭和二九年）

わが友は雨降る今日をひとりいて

寂しからむと吾れ訪ね来し

雨にひじ締める裳裾に手もすまに妹は

アイロンかけて贈りぬ

うからより親しき友と夜もすがら

語らむと来ぬ雨も厭はず

### 八 矢澤孝子の歌に見る明治末から

### 大正時代初期の野田福島の風景

居宅の近くにあった「野田の藤」は、孝子の目にどのよう  
に映っていたのであろうか。『鶏冠木』に三句、『はつ夏』に  
二句みられる。これらは明治末から大正初期に詠まれたもの  
で、それ以降、野田の藤を詠んだ歌は見当たらない。当時、  
藤は初夏に咲いていたらしい（今は四月末に咲く）が、徐々  
に咲かなくなつたようだ。主宰の「藤乃歌舎」の名づけから  
は「野田の藤」を意識していたであろうことが推察される。

夕月のもとに見上ぐる三尺の

藤の花より髪（鶏冠木）の重たき

夕ごとに  
出でて仰ぎぬむらさきの

咲き初むる藤散り初むる藤（同）

夕月は藤ちるかげにほの匂ふ

ひとり寝るべき戸にはかへらじ（同）

ゆかしさに歩みよりたるむらさきの

藤のしづくにぬれし髪かな（はつ夏）

夕されば雲もこころも静まりて

天地あめつち匂う白ふじの花（同）

他に藤の花を詠んだ歌があるが、これは富田林の弘川寺②①で詠まれたものである。

ゆくりなく青葉の山にむらさきの

雲かかりたり藤浪の花

市街化が進み、明治二六年開業の「福島紡績」のほか「大日本紡績」とそれぞれの工場が競って操業しはじめ煤煙が舞うようになった。また電車が走りだし家も増えだした頃の野田福島付近を映したと思われる歌が幾首が残る。

蚊のごとく煤の飛び来てうたたねの

顔にぎれ書く大阪の夏

わが家はおおえんとつ大煙突の風下に  
うきおもいする日のつづくかな

夕ごとにそぞろ歩きをよるこびし

青田も今日は家ならびけり

おもむきに入りし語りをさまたぐる

しばし電車の憎きとどろき

電車まで送ると言ひて電車には

遠き道をば選びけるかな

工女等はうたひながらに帰り行く

吾はさびしき夕ぐれどきを

しだらなき歌にはあれど心より

うたへる声のうらやましさを

「銭湯のみち」（大正一三年作）『矢澤孝子歌集』より。

孝子は野田恵美須神社東門前の「宝湯」に通っていたのであるうか。

わが日風呂この裏町の女らに

こころ咎めてうなかぶし行く

ゆきかへり一筋道のすべなさに

この裏町に目はなじみたり

せまき家のそとの床机に腰かけて

子を抱く女房われを見送る

よれよれの衣はだけて兎に吸はすか

黒き乳房あらはに見せて

うしろよりわがうわさする声さえも

低めむとせずこの辺の女

また都心の三越百貨店に出かける令婦人であった。

戎橋はしの根方の三越の広告を見し髪のよきひと

三越の陳列品のとりどりが瞳にうかび来る夜の小床の

春の午後洋画の会を見に行くと三越までを車ならべぬ

次の句に見られるように、十三堤まで足を延ばしてかなり長い散歩をしていたようである。

大空に月よりあらぬ春の夜の十三堤を君と歩みき

月明の十三の橋のゆきかへり大阪に住む心地忘る

湯上りの髪のしずくを吹きはらふ十三堤の青草のかぜ

\*\*\*\*\*

⑳ 弘川寺 西行法師最後の安住地。役行者開基。そのみ墓に参る。(昭和五年)

## 九 おわりに

◇孝子には実子がいなかったため、昭和六年、平岡善雄の遺子和美(八才)を養女にした。更に昭和一三年、兵庫県篠山町の従兄の三男・喜多川三夫を嗣子に迎え、京都高等工芸学校に入学させた。三夫は同校図案科を卒業後大丸に就職した。三夫は

昭和一七年入営、満州に出征しその後少尉に任官した。昭和一九年許婚平岡和美と結婚のため帰国。挙式後ただちに帰任。六月和美も単身満州に出発。昭和二一年初孫恵を連れて引き揚げ帰国。昭和二四年三夫も無事帰国。昭和二九年、住吉区長居の大丸新築社宅に移転。昭和三十一年三月諏訪森中村邸の「あけび歌会」に出席した際、気分が悪くなり早退。これが歌会出席の最後となった。同年四月五日心臓弁膜症による心臓麻痺のため門弟に看取られて永眠した。享年八〇歳。

◇「東の与謝野晶子はあれだけ有名になったのに対して、なぜ西の矢澤孝子は忘れ去られたか？」という疑問が残る。よく知られている与謝野晶子の歌を紹介するので、両者の違いを感じ取っていただきたい。

その子二十櫛にながる、黒髪の

おごりの春のうつくしきかな

清水へ祇園をよぎる桜月夜

こよひ逢ふ人みなうつくしき

やは肌のあつき血汐にふれも見で

さびしからずや道を説く君

むねの清水あふれてつひに濁りけり

君の罪の子我も罪の子

くろ髪の子すじの髪のみだれ髪

かつおもひみだれおもいみだる、

人の子の恋をもとむる唇に

毒ある蜜をわれぬらむ願ひ

晶子は、鉄幹を追って上京し、さらにシベリア鉄道でパリに行くなど当時話題を振りまいた。歌人・作家・評論家など多面的活動を展開している。源氏物語の現代語訳『**新新訳源氏物語**』をはじめ著書も多く、女性解放思想としても巨大な足跡を残した。

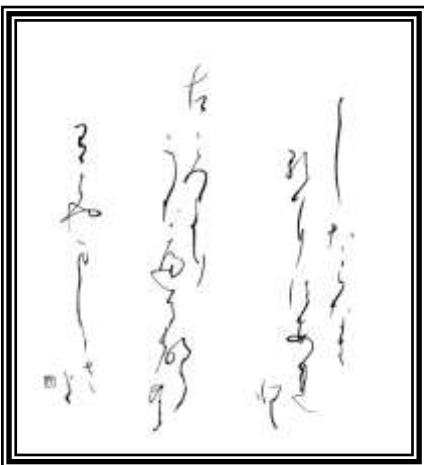
◇歌については全くの素人の上、原稿の締め切りまで一カ月しかなく、本稿を引き受けるのにはかなり躊躇したが、歴史研究会のメンバーに励まされて筆をとった。不満足な点多々あるがご容赦願いたい。

## 謝辞

本稿執筆の端緒となった資料をご提供いただいた市川良雄氏（野田小学校三三期生。阿倍野区天王寺在住）に厚く感謝いたします。本稿は明石利代著「大阪歌壇の矢澤孝子（その一）」『創作』に登場するまで―及び「大阪歌壇の矢澤孝子（その二）」『創作』から『潮騒』まで―を骨格として矢澤孝子の生涯をその詠み歌で辿ってみました。明石利代氏に深謝申し上げます。

## 参考文献

- 『矢澤孝子歌集』あけび叢書第二三編 大阪あけび歌会一九六二  
『鶏冠木』矢澤孝子編 田中書店 一九〇七  
『はつ夏』矢澤孝子 梁江堂 一九一四  
『湯気のかく絵』矢澤孝子 宝塚叢書第三編、一九二四  
『大阪歌壇の矢澤孝子（その一）』明石利代 『女子大文学 国文編第20号』大阪女子大学文学会 一九六九 所収  
『大阪歌壇の矢澤孝子（その二）』明石利代 『女子大文学 国文編第22号』大阪女子大学文学会 一九七一 所収  
『**楓の下の恋情―近代大阪の女流歌人・矢澤孝子―**』宇田正 『大阪春秋 第一〇四号』二〇一一 所収  
『都会 第六号』都会詩社 一九一〇  
『**大阪短歌界の揺籃時代**』花岡桃崖一九三三『上方26号』創元社 所収  
『発禁本―書物の周辺』城市郎 桃源社 一九七六  
『現代短歌大事典』三省堂 二〇〇四  
『月刊俳誌 倦鳥 3月号』倦鳥社 一九六九  
『日本女性人名辞典』日本図書センター 一九九三  
『紡績工場のレンガ塀』大西俊子『福島てんこもり 18号』福島てんこもり 二〇一一 所収



しだらなき  
歌にはあれど  
心より  
うたへる声の  
うらやましきよ  
書 筒淵公裕

展示「福島区ゆかりの人物」より

## 長屋の調査（海老江東地区） 末廣 訂

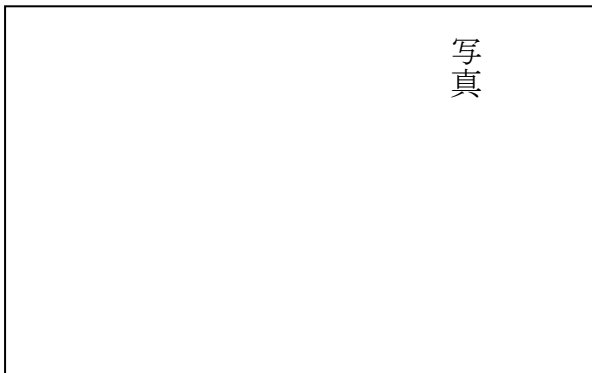
### 調査感想

調査日 ; 平成二九年一月～二月 (四回)  
 調査地区 ; 海老江一丁目～四丁目  
 調査者 ; 末廣 訂

長屋総件数 ; 二三三軒 (うち空き家、倉庫三八軒)

### 内訳

丁目	戸数	うち空き家等
海老江1丁目	46	4
海老江2丁目	79	12
海老江3丁目	45	5
海老江4丁目	63	17
合計	233	38



- 1 海老江一丁目地区は旧浦江（現鷺洲）と接する地区で、大変広い地域だが、海老江東小学校、旧大日本製菓、イオン、旧車輪工場（現マンション）、倉庫等があり、比較的長屋が少ない地区。
- 2 海老江二丁目地区は野田阪神から旧北大阪線ができた大正時代に発展した地域で病院、公設市場、配電所があり、井路川を埋めた路地が多い。
- 3 海老江三丁目は先の大戦で大きな被害を受けた地域である。海老江上公園中心に昭和二〇年三月一三・一四日の焼夷弾、また、淀川沿いは六月二六日の一トン爆弾で被害を受け、凸版印刷工場の拡張で人家が減っている。
- 4 海老江四丁目は 三丁目の一部と旧海老江村の中心地で、旧大和田街道（梅田街道）が通り、神社、南桂寺、旧庄屋があり、先の大戦の被害もなく、昔の面影を残す地区である。
- 5 戦後の時代から海老江地区も大きく変わってきており、マンションや長屋の跡地に三階建の一軒屋が建ち風景が一変してきている。風呂屋は軒が軒に減った。また、旧庄屋屋敷は今はないが、ところどころに蔵や戦前の古い屋敷が残っており、昔の名残がある。



## わが町案内

末廣 訂

平成二九年は秋に二回のまち案内の機会があった。

はじめは、九月二四日(日)、二回目は十一月十八日(土)である。

### 一 「大和田街道」九月二四日の案内

三月頃、「なにわの宮リレーウォーク実行委員会」から九月に大和田街道の案内を企画しているので、地元の福島区歴史研究会の協力を得たいと話が事務局の私に入ってきた。

なにわの宮リレーウォーク委員会は大阪市内各地のまち案内や歴史研究会のボランティア活動をされている一二団体からなる」と知った。そして大阪文化財研究所が協力機構としてある。

会長の安藤氏と事務局長の菊池氏が相前後して打ち合わせのため自宅に来ていただき、ルートや案内図や説明資料の作成に時間をとった。当初の案は、JR福島駅から鷺洲―海老江地区―淀川大橋を渡って西淀川区の大和田方面までのコースを考えていたようだが、最初の下見をされた結果、距離が長いので、二時間では収まらず、コースを海老江から大開経由して野田阪神から玉川のノダふじや野田城に変更し、コース名も『大和田街道―八十島と戦国古跡をめぐる街道』に変更された。

歴史研究会の月例会で何度か経過報告をして、我々の役割分担を決めて、九月三日の日曜日に下見と事前打ち合わせを兼ねて午前十時ごろからJR福島駅に主催者側と我々の会とが顔合わせをして、事前案内のスタートを切った。

九月三日は事前準備ということだったが、関係者で二〇名近い参加者があり、前半の鷺洲地区は田野登会員、後半海老江地区は末廣が、そして野田・玉川地区は藤三郎会員が担当した。懇切丁寧な説明をすればするほど時間の経つのが早く、委員の方から急ぎ立てられたこともあった。

さて、本番の二四日のガイドでは、当会の担当は一班と二班いずれも二五名ぐらいの参加者を引率して説明したが、一班は前半末廣と後半は藤会員が、二班の前半は田野会員、後半は宮本隆正会員がガイドをした。

本番二四日にガイドした田野登会員が本人のブログで紹介しているのを抜粋する。

【コースはいつもの「大阪あそ歩」の海老江・鷺洲コースの逆回りでしたので難なくこなしましたと言いたいところですが、下見の時、聖天さんで時間をとりすぎ、主催者から注文が付いたので、いつもと違って多少端折りました。売れても売らない「占い」商店街では、南の方に見える福島公園が五百羅漢のお寺・妙徳寺の跡と、写真や錦絵で説明した。海老江に向かう途次、塩野義研究所・大日本住友製菓の跡地の案内をしました。海老江では井路川沿いにあった樹齢二〇〇年といわれている大きな楠木、南桂寺では俳人・松瀬青々の墓や郭公塚(ホトトギスの墓)を見学し、八坂神社に詣で、国道を渡った。

この先から大和田街道・梅田街道を大きく逸れます。その昔、海老江の芦屋と言われた・石畳路地から阪神本線を挟んで大開に入った。このあたりは聖徳太子の時代、廃仏毀釈で尼さん三人を池に沈めたと、それが祟ってか雨夜に火の玉が出るという「摂陽群談」の尼ヶ淵伝説の記事を話し、松下幸之助創業の地が「大開」とは験のええ話ですが、

参加者から「その時代は、土地も安かったのでしょう」と発言。また、当時通天閣の日立の広告に対し、野田阪神では幸之助創業の地の地元「ナシヨナル」の広告塔が建っていた。その後、地下鉄千日前線「野田阪神駅」ができた。

もちろん、当時の写真で実証した。以上駆け足で二時間のガイドでしたが、その後は野田フジの野田担当ガイドの宮本会員にバトンタッチをした。会から頼まれての仕事を終えてホッとした【

と当日の状況を詳しく報告してくれた。

なお、当日は福島駅前の草野会員の店先を借り、また受付の椅子やテーブルまでお借りしてお世話になった。当日参加された方は六四名で、最終三班でガイドをした。またアンケートによると、参加者の大半は六〇代以上の方で若い方は少なかった。またコース設定もほぼ良かったという意見もいただきホットしている。実行委員会では事前の準備、特にコースの下見、案内のチラシやコースのマップ・各所の案内／説明書き、印刷等大変な準備であったと思う。

当日は天気も良く、無事終えることができ、安堵した。

## 二 福島区未来わがまち会議 のまち案内

一月一八日の土曜日に福島区役所の「未来わがまち会議」が主催するまち案内の依頼を受け今回は野田阪神駅から海老江―鷺洲―大淀―福島のコースでガイドをした。

未来わがまち会議の活動は一〇年ほど前に、大阪市内の各区が郷土の歴史や文化・生活環境等を広く区民に知ってもらうと企画され、活動を開始したが、現在その活動を続けているのは福島区等二〜三区だけのようだ。

今回は海老江・鷺洲地区を案内してほしいと鷺洲地区で会議のメンバーの水谷さんから依頼を受け、前回案内したコースと若干変えて、野田阪神から海老江・鷺洲の聖天さん・JR東海道高架下の戦争の傷跡を見学し、新たに大淀の浦江神社からヴォーリス建築設計の教会から関西将棋会館まで足を伸ばした。

このコースに基づき、区役所担当の方と、マップ・道順・各地の説明ガイド作成の手伝いをして、本番の十一月一八日を迎えた。当日は残念ながら朝から小雨が降り、やや寒かったが参加応募された方二十四名とわがまち会議と区役所のスタッフが野田阪神駅に集合して海老江に向かって出発した。

今回のコースでは、浦江の聖天さんから現在では北区になってしまった浦江の八坂神社（素戔鳴尊神社）を案内した。もともとは現在の鷺洲と同じ村であり、現在でも区が違っても、鷺洲の氏神さんである。明治になって浦江村を縦断して鉄道が敷かれ、しばらくは北浦江と南浦江村として南北に長い村であった。その後、西淀川区浦江町と言った時代があり、昭和一八年四月に福島区が誕生したときに、東海道線より北（旧北浦江）は新しくできた大淀区になり、そしてその後北区に編入されてしまった。

今回もう一つの話は前年（平成二八年）九州場所で大坂出身力士として八六年ぶりに大関・豪栄道が初優勝したが、八六年前の優勝者であった山錦関がこの北浦江出身であり、鷺洲小学校から当時の関西大学・本科に進学し大正六年東京相撲協会・出羽海部屋に入門、二二年に入幕したことがある。

『鷺洲町史』に山錦善次郎関として紹介されており、引退後、浦江八坂神社本殿前にクスノキと玉垣を奉納、これも紹介しなかった。そ

して当時、山錦が通った福島七丁目に記念碑がある関西大学福島学舎跡にも足を伸ばした。

その後、大丸百貨店を手がけた建築家・ヴォーリスが設計した日本基督教団大阪福島教会と最近話題になった中学生の藤井聡太四段が二八勝目を勝取った関西将

棋会館を案内した。ただ残念ながら五階に江戸城本丸にお城将棋として公式行事として使用された「御黒書院」を模した書院造の部屋があるが、当日は見学できず残念であった。

聖天了徳院では大谷区長が別の行事後、途中参加されく最後まで一緒にいただいた。また、聖天さんでは檀家総代の方が我々を待っていただき、「さざれ石」の話等説明をしていただいた。

**最終地**のJR福島駅前の阪神ホテル広場で円陣を作り、区役所の樋野課長からお礼の挨拶があり、お開きとなった。

翌日、当会のセミナーがあった折に、前日のまち案内に参加したTさんから、大変珍しく、また貴重な昭和五年の五月場所、山錦関が全勝優勝した大相撲番付表（新聞大の）原本を持ってきていただいたので、早速専門店で数枚コピーをして、山錦関の親戚や浦江の八坂神社、鷺洲小学校等関係者に贈呈し、大変喜んでもらった。

九月初めに、右肩の腱板断裂で手術をした後なので、少し痛みがあったが、九月と十一月の二回のガイドを最後まで案内できたので、多少、体力の自信ができたと感謝している。



## 阪神電車初代社長・外山脩造<sup>とやま</sup>

—100年を経て今に引き継がれるDNA—

（平成二九年 第二回セミナー報告）

末廣 訂

日時 六月二五日（日）午後二時～午後四時  
会場 福島区役所 六階大会議室  
講師 平尾 正氏（株）阪神ステーションネット取締役  
参加者 **五三名？**

### 一 はじめに

当日は雨天にもかかわらず、五〇名を超える参加者を迎え、福島区役所六階大会議室で開かれた。冒頭、大谷区長から今回のセミナー開催のお礼、講師の紹介、阪神電車と福島区、そして数年後に開催を期す万博と町おこしの等の話をされた。

岡倉会長代行からは、自分は大阪検定を通った数少ない、また、大阪についてよく知っているのを自負していたが、今日のテーマの「外山脩造」についてはよく知らないのです、非常に楽しみにしている、と挨拶。

### 二 講師 平尾 正氏の職歴の紹介

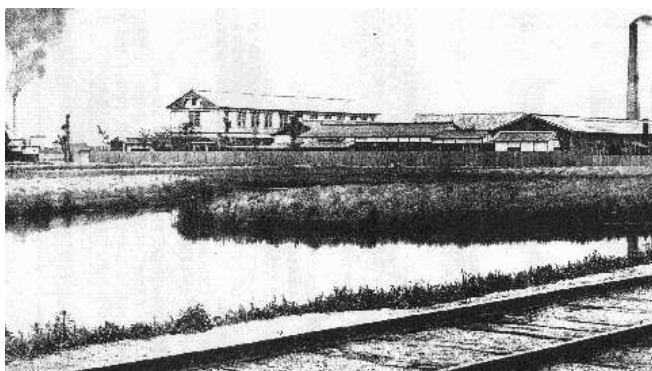
講師の平尾正氏は平成七年に阪神電気鉄道（株）に入社され、総務部、社長室（現経営企画室）を経て、平成二五年からは「阪神沿線の活性化」に向けた仕事をされ、沿線のレストラン、食堂については食

べつくしたという企画マンで、仕事を通じて阪神電車と沿線のPR活動をされている。

### 三 外山脩造の生涯と阪神電車社長就任まで

正直言って大きな業績を残されている割には外山脩造氏の事はあまり知られていないと思う。今回のセミナーを通じて、幕末、越後（長岡）に生まれ歴史の大波を乗り越え、日本の近代化を推し進めた信念の人であり、日本銀行の初代大阪支店長や欧米で先進事業の調査を行い、帰国後、現アサヒビール等の事業を立ち上げ、明治三二年に阪神電気鉄道の初代社長に就任されたことを知った。

外山脩造氏は幼名「寅太」で河井継之助に師事し、継之助が福島のみ見川で息を引き取った最後まで同行した。慶応義塾から大蔵省に入省し、渋沢栄一の推薦で当時の銀行の再建にも尽力した。阪神電車ではまず、日本最初の高速広軌の都市間電気鉄道を実現させた。事業開始前の資金難を乗り切り、開業後は順調にスタートしたのを見届け、多くの人材を登用し、明治三八年に社長を辞任。戦前甲子園駅前に昭和三年に建立された本人の立像があったが、今はない。また「阪神タイガース」の名前は幼名の「寅太」に由来するという説もある。明治四〇年頃、西



西野田職工学校創設時の校舎、手前が阪神電車

野田職工学校（現西野田工科高等学校）創立のアルバムに、当時の阪神電車のレールが写っており、一帯は泥沼が広がり、背後に大阪の工場群の煙突から煙が出ている風景写真がある。地元福島区に本社があり、一番身近でよく利用している阪神電車が今や阪急や近鉄グループまた、山陽電鉄とつながり奈良から姫路まで広範囲に行ける便利な鉄道である。

初代外山脩造社長のDNAを引き継いで技術力を生かした近代的な電鉄事業と周辺の地域開発に営々と発展してもらいたい。セミナーの最後に、話に感動した人から義援金を募って「外山脩造の碑」を再建してはどうかという提案があった。

### 四 余話・歴史のつながり

司馬遼太郎の小説『峠』の最後の部分に、死に直面する河井継之助が当時の外山脩造の幼名「寅太」に言った言葉【「寅や」このいくさが終われば、さつさと商人になりやい。長岡のような狭い所に住まず、汽船に乗って世界をまわりやい。武士はもう、おれが死ねば最後だよ。】という一節がある。

この言葉は継之助が幕末、岡山の備中高梁の家老であった「山田方谷」を二度訪問し、実学の心髄を外山脩造に伝授した言葉である。継之助が師事した山田方谷は農民から家老になり、一時は幕府の老中になった藩主を助けるため江戸まで行き、また借金であった藩の財政を立て直した人物であるが、この「方谷」の名前も外山脩造と同じあまり知られていないのが残念である。

全国でただ一駅のみ人名が付いた伯備線「方谷」駅はまさに「山田方谷」の功績からつけられた駅名である。河井継之助は備中高梁の山



田方谷から「当時の経済・経営」を学び、  
してうけつがれていることを今回の  
セミナーで知ったのは大きな発見で  
あった。

一〇年ほど前に、三回ほど備中高  
梁を訪問し、「方谷セミナー」に参  
加したことを懐かしく思い出した。



## 関に護られた都・難波宮―福島区歴史研究会

### セミナー―平成二九年第三回 報告―

林 俊二

日時 一月一九日(日)午後二時～四時  
会場 福島区民センター 三〇一号室  
講師 服部静尚氏(古田史学の会会誌編集責任者・  
福島区歴史研究会会員)

参加者 三八名 (会員一五名 一般二三名)

「古田史学の会」は、『魏志倭人伝』や『日本書紀』等数多の文献  
の矛盾点を追及し、九州王朝説を真説と考え、九州年号の整合性を調  
べている団体である。『日本書紀』の矛盾点について、別の観点から  
論理的に真実を追求する姿勢に立っている。

#### 一 内容

古田武彦氏の「七世紀の難波宮は九州王朝の都であった」という仮  
説を話す。論拠は、

- 一 中国の正史に日本のことを前漢・後漢の頃から、倭人・倭国と書  
き、南の大海にある国といていた。Ⅱ九州説
- 一 三国志の魏の頃、『魏志倭人伝』に卑弥呼が朝貢に行き、神獸鏡  
の銅鏡を貰っている。
- 一 倭人は帯方の東南の大海の中にあり、帯方郡(現在のソウル辺り)

#### 「まちけん参上」に草野さん出演

一〇月二二日のNHKの放送で会員の草野則一さ  
んが福島聖天通商店街理事長としてクイズの出題者  
で登場、商店街振興に苦勞した話もされました。  
番組では、将棋会館や福島天満宮・福沢諭吉誕生碑  
など福島駅周辺の紹介がありました。



より女王の国に至るに、一万二千里とあるが、この時代の里程は一里七五メートルであるから、郡より女王国は九百キロメートルと考えられ、この距離だと北九州辺りを指すことになる。||九州説

一 卑弥呼が死に、大いに冢を作る、と書かれているが、冢とは塚のことで、中国の劉備でも冢を山の上に作った程度であるから、箸墓古墳は卑弥呼のものと思えない。巨大過ぎる。

一 発掘された鉄器類（刀や矢鏃）は、九州地方に大半が見つかったおり、次いで山陰・山陽と多く、奈良県では少ししか見つからない。大きな勢力は九州にあったと考えられる。

一 難波宮の造営は全国統一を考える九州王朝が、七世紀に畿内に進出して来たのではないかと考える。（仮説）

一 『日本書紀』の記述に、「初めて竜田山・大坂山に関を置く。仍りて難波に羅城を築く」とあるのは、奈良県の竜田山、大坂山はこれも奈良県の関屋辺りを指すと考え、大和方面からの敵に備えたのではないか。

一 難波宮の西方に備えが無いのは、九州王朝の勢力圏であるから必要が無いと考えられる。

一 以上のことから、難波宮は近畿天皇家の都ではないと考えられる。（仮説）

次いで

一 難波宮を護る羅城は、上町台地に築かれていたと古文書に書かれていること、少し後の三関（鈴鹿・不破・愛発）の立地条件と役割

について。

一 中大兄皇子が難波宮から役人を連れて飛鳥に帰ったとの記述があるが、飛鳥には広い宮城が無い。

一 「賀正礼」という行事。

一 九州王朝が決めた畿内と近畿天皇家が決めた畿内の考え方の違いについて。

## 二 質疑など

講演のあと、三人から質問が出たが、近畿天皇家が本筋と考える人にとつて、九州王朝の話は、俄には信じ難く、質疑のやりとりも、なかなか結論が出ず、時間切れとなった。

話の途中、九州年号は大宝元年から元号と一致するようになったとの話は、何故なのか、興味深く思った。

私もなかなか理解し難かったが、論理的手法で説明される服部講師のお話には刺戟を受けた。

次回にはどのようなお話を聞かせていただけるのか楽しみだ。



会員の原稿を

募集します！

福島区の記録を

残しましょう



### 【古い写真】 枕崎台風

戦後まもなくの一九四五年九月一八日、強烈な高潮を伴い、区内の多くが浸水し、約四〇日間減水しなかった。当時は新聞などのマスコミの報道も少なく、行政も戦後処理におわれ、戦災・疎開などで住民も少なかったのか、記録・記憶にとぼしい。

写真は現在の野田二丁目（提供・映光社）



福島区歴史研究会 2017年下半期の事業

\*\*\*\*\*

2017年 下半期の活動記録

ホームページ <http://o-fukushima.com/rekishi/top.htm>  
(会報バックナンバーも掲載)  
(印刷：谷口印刷紙業)